

2015年1月11日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 27～40 節

説教：生きている者の神

## 1 復活を信じないサドカイ人

再びルカの福音書をしばらく見て参ります。

今の日本では、仏教と言ってもさまざまな宗派があるように、二千年前のイスラエルにも同じ旧約聖書を教典としながら、さまざまな宗派が存在していました。福音書で何度も登場するパリサイ人や律法学者もそうですし、今日登場するサドカイ人もそうです。彼らは古くからの大祭司の家柄です。当然聖書のことはよく知っています。けれども宗教的なことにはあまり関心がない。世間体とか家柄のことが大切です。死人がよみがえるなどばかげた話だと思っています。皆さんもかつてそうだったと思いますが、多くの人たちはよみがえりを信じません。二千年前もまったく同じだったのです。

サドカイ人たちは、神殿の中で教えておられたイエスの所へやって来ます。なんとかしてイエスの言葉尻をつかんで恥をかかせ、こてんぱんにやっつけたいと狙っています。どうしてイエスのことをそんなに憎むのか。イエスはあるとき人々がいる前でサドカイ人に向かって、「お前たちはまむしの末である」と言ったことがありました。何しろ世間体を気にする人たちですから、そんなことを言われてプライドを大いに傷つけられました。それ以来、イエスの振る舞いはいちいち気に入りません。なんとかして雪辱を果たしたいと思っています。

今その機会がやって来ました。人々の見ている前でこんな質問をします。「先生。モー

セはこんなことを書いていますね。もし兄に妻がいて子どもがないまま死んだ場合、弟は残された女性を妻に迎えなければならない。では、七人兄弟がいたとして、次々に同じことを繰り返し、最後に女性も死んだとしたらどうなるのですか。復活の際には、その女性はいったい誰の妻となるのですか。もしかして、兄弟全員がひとりの女性を妻とするのですか。もしそうなるというのなら、こんな汚らしい話はない。」

皆さんもおわかりのとおり、サドカイ人はもし復活があるとすれば、こんなばかげたことが起こることになる。だから復活などあるはずはない。そう言いたいのです。これに対し、イエスはどのように答えられたでしょうか。

## 2 イエス

1) 「その名がイスラエルから消し去られないように」

34 節から 36 節。「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、次の世に入るのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められた人たちは、めとることも、とつぐこともありません。彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また復活の子として神の子どもだからです。」

ここに、「めとることも、とつぐこともありません」とあるので、夫婦という関係がなくなってしまうかのように読み取ってしまいます。ある方は残念に思い、ある方は喜ぶ

かもしれません。誤解しないでいただきたいのですが、私たちに結婚という制度を与えてくださったのは、創世記2章を読めばわかるとおりに父なる神です。ですから次の世では夫婦の関係がなくなると言っているのではありません。ここで問題としているのは別のことです。

では何か問題となっているのか。サドカイ人が取り上げたモーセのことばに戻ってみます。兄が死んだ場合、どうして弟が残された女性をめとる必要があったのか。その理由が申命記25章6節に書かれています。「そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならぬ。」

子どもがいなくても兄が死んだとき、なにもしなければ家の名前がイスラエルから途絶えてしまう。そうならないようにと、夫に死に別れた女性を弟がめとる。日本でも家の名前が途絶えないようにと、娘しかいない家ではわざわざ婿を取って子どもを産ませることがありますが、それとよく似ています。それが私たちの生きている世界で行われていることです。

しかしよみがえりの世界、ここでは「次の世」と言っておりますが、そこではどうなるのか。もう誰も死ぬことができません。死ぬことができませんから、子どもがいなくて家が途絶えるとか、そんなことは起きない。永遠にイスラエルに名前がとどめられていきます。子孫が途絶えないように子どもを産まなければならぬ、そのために女をめとらなければとか、とつがせなければ、もうそんな話はなくなる。イエスが言おうとしていたのはそのことだったのです。

## 2) モーセがよみがえりを語る

でも、本当によみがえりはあるのでしょうか。サドカイ人は、モーセのことばを取り上げて、復活などないのだと言っておりました。これに対しイエスは、その同じモーセのことばを取り上げて、モーセも復活を信じていたことを示していきます。

37、38節。「それに、死人のよみがえることについては、モーセも柴の箇所、主を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、このことを示しました。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」

出エジプト記3章6節に、「わたしはあなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」とあります。アブラハムもイサクもヤコブも、モーセにとっては全員過去の先祖たち、死んだ人たちです。神は死んだ人たちの名前を呼んでいた、そんなふうにならずにこの箇所を理解していました。実はそうではない。神は生きている者の名を呼んでいたのです。イエスが説明してくれなかったならずと誤解したままだったでしょう。神が名を呼ぶとき、それが過去の人であろうか未来の人であろうか、次の世に入るのにふさわしいと認められている人たちなのです。神にとっては常に生きている人たちなのです。

先週、母の葬儀のために岩手に戻りました。食事の席になったとき、私の隣に私と同世代である義理のいとこ座り、キリスト教のことについて熱心に質問をしてきました。私はこんなことを伝えました。「キリスト教の大きな柱は二つある。一つは罪の赦し。もう一つは死からのよみがえりです。世の中には、

人が幸せになるためにはこうすればよいです、そんな話がいっぱいある。確かに努力すれば少しは幸せになれるかもしれない。でも、結局人は死んでいく。どんなに財産を持っていても、この世でどんなに大きな功績を残したとしても、最後は裸になって死ぬしかない。人間はいろいろな悲しみを経験するけれども、元をたどれば結局、死から逃れることができない、それが人間の最大の不幸ではないか。そのことを解決しない限り、どんなことをしてもむなしくなるだけです。『私は宗教は信じない』と言っている人たちが沢山います。でも、自分のいのちがあと数ヶ月ですと言われて平気な人はいるだろうか。いったい自分の人生はなんだったのか。死んだらどうなるのか。誰もがその問題にぶつかって苦しむ。ふだんは宗教など信じないと言っても、いつかは向き合わなければならないときが来る。では何を信じるか。せつかく信じるのであるなら、本物を信じたいと思うのは当然でしょう。ではどれが本物なのか。死の解決をきちんと語っているものではないですか。キリスト教は、真正面から死からのよみがえりを語っています。」

それを聞いていた義理のいとこは、「難しいことはよくわからないけれど、あなたが信じているのなら、信じてみたい」と言ってくれました。

### 3) よみがえりがあることを明らかにするために死ぬ

聖書は最初から最後まで一貫して復活を語ります。とは言え、死んだ人がよみがえり、次の世に迎えられた人は、これまでだれもいません。「彼らはもう死ぬことができないからです」、と言われてもだれもそんな人を見

たことがありません。イエスが何か大切なことを言われるとき、いつもそうですが決して他人事のように言われることはありません。かならずご自分の問題として引き受け、語ったことばに対して責任をとろうとされます。

「死からのよみがえりは必ずある」と言う方は、ことばで言うだけではなく、ご自分で証明します。どのようにして証明するのでしょうか。生きてままで証明できますか。できません。証明するためには、死ぬ必要があります。ということは主はここで何を語っていることになるのか。復活は確かにあるのだと強調すればするほど、この方は十字架で死ぬうとしているのです。いのちをかけて、よみがえりは確かにあるのだということを明らかにしようとしておられます。

### 4) 私たちの神となられる

最後に、生きている者の神であるということが私たちにどんな影響を与えるのか。このことを確認しておきます。

私たちは主を信じたとき、神は私たちの神となってくださいました。主は私たちの名を呼び、ご自分の所に招いてくださいました。変な質問かもしれませんが、いつまで私たちの神となってくださいるのでしょうか。この地上で生きている間だけ、ですか。死んでしまったらあなたはもう過去の人。いいえ。この世のいのちが尽きたとしても、なお私たちの神なのです。神はご自分の口で、「わたしはアブラハムの神である」と言われたのです。そうすると、この方が私たちの神となってくださいましたということは何を意味しますか。あなたは死ぬことはない。死ぬことはできない。あなたはすでにいまからそんな扱いをされていることを示します。

この一年、週報の表紙に詩篇 16 篇 10 節のみことばを掲げてきました。そこには、「あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません」とあります。私たちが墓の穴をもう二度と見ることがないように、主はいのちをお捨てになられ、ご自身が真っ先に墓の穴に葬られ、三日目に父なる神の御手によりよみがえってくださいました。

よみがえられた主の御顔を間近に仰ぎ見たいと願われます。